

特集 「ロケーション 鈴木昭男＋藤本由紀夫」

「ロケーション 鈴木昭男＋藤本由紀夫」は、名古屋市美術館の開館20周年を記念して昨年の2月から3月にかけて開催した「20年のあゆみ展」(2009年2月21日－3月29日)の記念催事です。

「20年のあゆみ展」では名古屋市美術館のこれまでの活動を幅広く振り返りましたが、教育普及活動の一例として平成元(1989)年11月14日に実施したジョン・ケージ(1912ー1992)のコンサートを取り上げました。ケージは、作曲、演奏、聴取に偶然性を取り入れ、西洋音楽の考え方や枠組みをひろげ、現代音楽の展開に大きな影響を与えた音楽家です。代表作のアレンジをケージみずからが初演したコンサートは、名古屋市美術館が実施した数多くの催事のなかでも特に記憶に残り、今日でも話題となるほどです。

鈴木昭男(1941-)と藤本由紀夫(1950-)は、ともにケージの試みを発展させている名古屋にゆかりのある現代音楽家です。名古屋市美術館の魅力のいくらかは、都心の憩いの場として整備された白川公園のなかにあることから生まれています。しかし、名古屋市美術館の立地の魅力に気づき、意識して楽しむことは、普段ほとんど行われていないでしょう。ケージのコンサートと立地の特色を楽しむことから発想し、企画したのが「ロケーション」です。「ロケーション」では、鈴木と藤本の作品を体験することを通して音を手がかりに名古屋市美術館の立地の特色を知ることができます。

鈴木昭男は朝鮮半島の平壤に生まれ、戦後引き揚げた小牧で育ちました。自分を取り巻く環境の音に耳を澄ませ、聴くことを通して世界と触れあう創作を行っています。現在は京都府の北端、丹後半島にある京丹後市に住み、ヨーロッパを中心に国内外で活動しています。

藤本由紀夫は名古屋に生まれ育ち、現在は大阪市に住まいして、関西を拠点に国内外で作品の発表を行っています。自身の作品を「フィロソフィカル・トイ（哲学的玩具）」といい、音を通して世界を知る用具として作品を制作しています。音の出る造形物を最初に「サウンド・オブジェ」と呼んだのは藤本です。聴くことの創造性を体験できる創作を行っています。

ふたりは、作曲し、演奏するだけでなく、音楽を体験するための仕掛けとして美術と同様の造形物を制作し、それらを画廊や美術館、



鈴木昭男《点音 in 白川公園》



藤本由紀夫《GARDEN—SHIRAKAWA PARK》

時の話題

Under Construction—〈球體建築〉建設中

すでにご存知の方もいらっしゃると思いますが、美術館の“お隣り”名古屋市科学館では、来春3月の新館開館に向けて建築工事が行われています。年が明けて「新天文館」の外観が出現し、その規模と形態が話題になりつつあります。直径40メートルにも及ぶとすると、その下に立つと正しく圧迫されます。これほど大きいとその眺望が気になり、白川公園の突き当たり位置するこの「球体建築」を背にして長島町通りを北に歩いてみました。広小路、錦、桜通りを横切り、更には外堀通りまで到達して、南を振り返ると、正しく“小惑星”を髣髴(ほうふつ)とさせるその建築は、両サイドに建ち並ぶビルのスカイラインのパースペクティブも相俟って、遥か彼方のdead-endにあたかも壁の隙間にボール



が挟まっているように見えました。

日々完成に近づく「球体」を遠・近で眺め、歩いていると、18世紀末、〈球体建築〉を構想した三人の建築家のことを思い出しました。「フランス革命期の幻視の建築家」と呼ばれる、ブレ、ルドゥー（1736－1806）、ルクー（1757－1825?）の三人のその特異な構想は、20世紀の後半になって“発見”、再評価されました。

なかでも、エティエンヌ＝ルイ・ブレ(1728－1799)が1784年に発表した直径135メートルにも及ぶ《ニュートン記念堂》の構想図(挿図)はとりわけ独創的です。天文学者のニュートンを称え、球体の荘厳さや美しさを強調し、宇宙そのものを象徴したその〈球体建築〉の内部は小さな石棺だけが置かれ、昼間は星の形をした開口部からドーム内に光を採り入れ、夜間になると内部に発光体が吊るされ外部を照らす、という構造が考えられました。建物の内と外で反転する光と影の効果は、宇宙に寄せる哲学的な思考を呼び起こし、宇宙の中心で光を感じ、或いは外部から超越的な視点で宇宙を見つめる“装置”としての機能を目指したものでした。

だがしかし、彼等が想い描いた建築は実現することなく終わり、そのドローイングだけが残され、それによって「幻視の建築家」という賛辞が与えられました。

現在建築中の(球体建築)は、プラネタリウムの施設だそうです。その内部は二層構造となるため、身体全体が宇宙のなかで包まれ、漂うかの様な空間は現出されないようですが、それでも、かつて「幻視の建築家」が夢見たスペクタクルを来春、私たちは名古屋で体験することができるのでしょう。(J.T.)

アートの旅「過去・現在・未来」

石黒 鏑二 (彫刻家・元名古屋市美術館参与)

彫刻・その発表形式の変遷 その2
パブリック・アートとしての展開

平面・立体を問わず、画廊や美術館といった特定空間に限らず、あらゆる「場」で芸術表出したいというアーティストたちの欲求は、ごく自然のことと言える。

また、近年の都市様相は、それを誘発する仕掛けという要素を肯定的につくり、積極的に先導する役割りさえ演じてきた。音とか光とか動きとか一過性の行為も含め、今や町を舞台とするパブリック・アートは、それぞれが賑やかに林立し彩りを強める。

パリのラ・デファンスのグラン・ダルシュ
 に向かうプロジェクトは、20世紀を代表する
 プロジェクトであろう。タキス、ジョアン・ミロ、ヤコブ・アガム、フランソワ・モ
 レールなどの実験的作品の数々。パレ・ロワイヤ
 ルのダニエル・ビュランによる歴史的空間を舞
 台とするもの。ダニ・カラヴァンによるセルジ＝ポ
 ントワーズの「大都市

軸」という都市全体に関わる壮大なスケールのもの。アメリカはシカゴ市民センター周辺の巨大彫刻群。ミシガン州グランドラピッズ。ニューヨークはチェイス・マンハッタン・プラザのジャン・デュビュッフェや、フェラドル・プラザのリチャード・セラ等の仕事で、これらを大きく先導した。

一方、「熊本アートポリス計画」や、「札幌・モエレ沼公園計画」、富山の「まちのかおづくり事業」など、各地で展開された都市単位のプロジェクトや、世界各地で開催されるビエンナーレやトリエンナーレ、またオリンピックや万博といった大型のイベントでの、マーク・ディ・スベロやマリオリヤラザバルやエデュアルド・チリーダなどの作品コンセプトが、多くのパブリック・アートに影響を与えこれを育てた。

中原祐介氏の紹介で知られるオランダのアムステルダムに住むヤン・ディベッツという作家による「赤い胸のコマドリの領域・彫刻」と名付けられた作品。それは、見るだけではその全体が決してつかめないで、想像のみで存在する彫刻である。今やアートという名による表現領域は止まることなく拡大しつづけている。

ように、鈴木にとって「音」は「立てる」ものではなく、「点てる」ものであることを教えています。

小牧から名古屋に通動していた若い頃、鈴木は名古屋駅の中央線ホームの階段にバケツにつめた空き缶やピンポン玉などのがらくたをぶちまけました。その音を聴こうとしたのですが、その後、環境に身を置いてその場に耳を澄まし、音を聞き取ることを「自修イベント」と名付けて長くつづけてきました。鈴木は、音を聴く自分の行為を「なげかけ」と「たどり」ということばで説明しています。今の鈴木は、がらくたをぶちまけるような「なげかけ」をしなくとも、意志と自覚を持って空間に佇めばそれで「なげかけ」となると考えているようです。《点音》は、ある場所に佇む「なげかけ」からはじまり、耳を澄まして聞き取る「たどり」によって、その場にすでに存在している音を私たちの意識のうちに立ち上げる作品です。自覚的に音を立ち上げる試みを「音を点てる」、すなわち「点音」というのでしょうか。

私たちは、鈴木が選んだ場所(点音ポイントという)に印した耳と足をひとつのかたちにしたマーク(点音マークという。挿図参照)の上に佇み、まわりの環境に身を置くことで、鈴木の体験を追体験します。場所から場所へと移動する道筋では、鈴木が点音ポイントを見出す過程を追体験することになるでしょう。

《点音 in 白川公園》では、9つの点音ポイントが美術館の敷地と白川公園の外周部に設けられました。普段、歩き、立ち止まることのない場所を散策する体験は、耳に豊で変化に富んだ音をもたらすだけでなく、目にも思いがけない光景をくりひろげて、新鮮な驚きを与えてくれました。《点音 in 白川公園》は、白川公園を管轄する緑政土木局の理解と協力によ

り名古屋市美術館の所蔵作品として今もそのまま残されています。季節や時間によって聞こえる音や目に見える光景は違います。昨年すでに体験された方も、そうでない方も、あらためて体験していただきたいと思っています。

点音マークは、ケージの左耳をスケッチしたことのある鈴木がその体験を思い出し、敬愛の思いを込めて自分の耳と足にイメージを重ねたものです。点音マークの上に立つ私たちは、ケージと鈴木の耳を借りてその場に耳を澄ませるのです。

鈴木のように耳に徹して虚心に音を聞くのは、実は容易ではありません。ケージと鈴木の耳を借りていると思うと、励まされているように感じられて、私の場合は気持ちが少し楽になります。

「庭」という意味の藤本由紀夫の《GARDEN》は、西洋音階の1オクターブ12音を基準とする規則に従って25脚の椅子を空間に配置する作品です。《GARDEN—SHIRAKAWA PARK》では、白川公園のグラウンドの南北の中心線上に25脚の椅子を等しい間隔で配置しました。椅子の向きは、360度を12等分し、北を「12」として時計の文字盤と同じに1から12を割り当て、1脚ごとに12面のサイコロを振り、出た数字に25脚それぞれを合わせています。8日間実施し、毎日違う向きの組み合わせで、25脚の椅子を南北に真っ直ぐ並べていました。

体験の手引きとして無料配布したリーフレットの文章に、藤本は《GARDEN》のアイデアはエリック・サティの《家具の音楽》とサン＝テグジュベリの《星の王子さま》から浮かんだと書いています。それは「椅子」と「椅子に座ること」に関わっているのですが、椅子に座ることが視点を変え、いつもと違う視界

や体験をもたらすことから、藤本は別のところでも「椅子は私たちを異次元に誘う旅行装置である」と書いています。

《GARDEN—SHIRAKAWA PARK》で用いた椅子は、リートフェルトの《赤と青の椅子》。20世紀を代表する近代デザインの名椅子のひとつです。角材と板で組み上げたシャープなかたちと赤、青、黄の三原色と黒の色彩が、グラウンドとまわりを囲む樹々の緑に映え、ほどよい対照を見せていました(挿図参照)。

《GARDEN》はマルセル・デュシャンの《音楽的誤植》からもアイデアを得ています。これは三声の合唱曲で、デュシャンは、一枚の紙に一音を書き、帽子に入れてかきまわしてから、紙片を一枚ずつ取り出して並べるという方法で作曲しました。それぞれの声部は25の音でできており、ここから椅子の数が決められています。どんな音が使われているかを知るために、25の音を藤本が並べ替えたところ、ぴたり2オクターブになったそうです。藤本は紙片を取り出すかわりにサイコロを振って、偶然の並べ替えという手法を取り入れています。ケージにも1930年代のはじめに25個の音を並べ変えて作曲した作品があり、藤本は自分でも偶然の並べ替えをしてみたら25という数が多くもなく少なくもない不思議な数だと分かったそうです。

私たちはこのようにして配置された椅子に座り、グラウンドの中央でまわりの音を聞くことになります。背板に身をあずければ遮るもののない空が目の前にひろがり、街の音が近くに遠くにと前後左右にゆらぎながら奥行きを伴って立体的に耳に入ってきます。その音を聞きながら、私の頭には目に見えない音の出所の光景が浮かび、横切りました。

目は遙か遠くを見ることができますが、耳はそれに比べて近く of 音しか聞くことができません。普段の生活で、目が見て、耳が聞くことのできる距離の違いを意識することはほとんどありません。しかし、視覚は遠い「そこ」を体験し、聴覚はそれに比べて近い「ここ」を体験するものなのです。白川公園に行き当たる道路を逆に見通せば、それを実感することができます。

《GARDEN—SHIRAKAWA PARK》では、グラウンドを取り巻く木立と建物に視界を遮られ、耳に届く遠い「そこ」を直に目にすることができません。耳は「ここ」にある身近なグラウンドの音を拾いながら、同時に視覚が体験できない遠い「そこ」を体験するのです。

藤本は、絵画は「ここ」にありながら「そこ」を体験するもの、遠近法は「ここ」から「そこ」へと通過することと定義します。《GARDEN—SHIRAKAWA PARK》がもたらした体験は、聴覚を通して「ここ」から「そこ」へと通過し、「ここ」にありながら「そこ」を体験するものでした。藤本は近年、レオナルド・ダ・ヴィンチの「視覚および聴覚機能を通しての遠近法を探求せよ」ということばに応答する制作を試みています。《GARDEN—SHIRAKAWA PARK》はそのよき作例であることを実感させる作品でした。

音を聞くだけでありながら、《点音》も《GARDEN》も深く音楽の理論に裏打ちされた作品です。難しいことを語りはじめると紙幅も私の理解も足りないのですが、理論を知らなくとも、マークや椅子がなくとも、身近な音に耳を貸すことはできます。日常にそんなひとときを持つ楽しみがあっても悪くはないでしょう。どこかでこれらの作品を思い出していただければうれしく思います。(み。)

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示 ⑤

前号に引き続き、作品の受け渡しの際の点検についてお話をしましょう。美術品を借用する時には、コンディション・リポートと呼ばれる、作品についてのカルテのようなものを作ることは前回お伝えしました。作品がどんな状態なのか？ どこに、どんな傷が付いているのか？ 額や付属品はどうなっているのか？ 等々を、所有者と借用者が互いに確認しながら、記録を取ったものがコンディション・リポートです。このリポートは、作品が美術館に到着して開梱する際や、展覧会が終了して次の会場(美術館)に移動する際にも常に参照して、状態に変化がないかどうかを確認します。展覧会でお借りした作品は、当然のことながら、お借りした時と同じ状態で所有者にご返却するというのが大原則ですから、途中で状態に変化があったりすると大きな問題となります。変化というのは、残念ながら良い変化ということはほとんど無く(稀にそういうこともあります)、大半は傷や汚れ、凹みなど、新たな損傷が見つかるというものです。そして、ここが問題なのですが、新たな損傷と思ったものが、本当に新しいものかどうか、判断するのがなかなか難しいのです。ナイフで付けたような傷ならば見逃すことも無いでしょうが、コンディション・リポートに記録する傷というのは、極めて微細なものが大半です。例えば絵画の表面をサッと撫でたような引っか

き傷の場合、長さは数ミリから数センチ、幅は鉛筆の先端よりもさらに細い程度の幅のものになりますので、それを正確に全て記録するというのは膨大な時間と根気が必要になります。それでも縦横数十センチ程度の小さな作品ならば、目を皿のようにして隅から隅まで丹念に調べるということも可能でしょうが、畳一枚ほどもある大きな絵となると、ほとんどお手上げ状態です。では、どうするかというと、所有者、借用者お互いに了解の上で、目に付く大きなもので、比較的新しいと思われる傷を中心に記録して済ませるということになります。しかし、この大きくて新しいというのがくせ者です。何ミリ、何センチ以上というような明確な基準があるわけではなし、また新しいかどうか厳密に区別することは困難で、相当主観的な判断にならざるを得ません。けっきょく、記録する傷の基準はあってなきがごとしで、点検に費やせる時間という物理的な制限に従って記録は作られることになります。おまけに、作品の表面に付いた傷や汚れや凹みは、点検の際の見える位置や角度、照明の当て方によって、はっきりと見えたり、まるで見えなかったりします。つまり最初からあったはずなのにうっかりと見逃してしまう、という危険性が常につきまとうわけです。作品の借用中、あるいは返却の際にこういう傷が見つかることがままあります。所有者、借用者ともに、最初からあった古い傷を見落としたと合意ができれば問題はないのですが、そうではないと難しくなります。どこで、何が原因で発生したのか？ どのような対応策を講じるのか？ 解決すべき問題が次から次へと発生し、その対処に追われることになります。(F)

展覧会 現在進行形

あいちトリエンナーレ2010 国際美術展

今度の夏、現代美術の大きなイベントが名古屋で開催されます。その名も「あいちトリエンナーレ2010」！トリエンナーレは3年に1度開催される国際芸術祭で、日本国内でも現代美術を紹介するものとしては、すでに、横浜トリエンナーレや越後妻有トリエンナーレなどが知られています。実は、90年代には、名古屋市美術館でも、アートとテクノロジーを交差する先端的な芸術作品を紹介するアーテックピエンナーレというのを隔年で開催し

ていたことがあったので、もしかすると、現代美術のこのような祭典は名古屋の方には案外馴染みがあるかもしれません。

さて、国際美術展と名前がつくからには、出品する作家も世界各国からやって来る訳ですが、今、まさに、夏の開催の準備のために、アーティストやキュレーター陣が続々来名しているところです。記念すべきあいちトリエンナーレの第1回目のテーマは「Arts and Cities」。現代美術を通じて、名古屋という都市の魅力を引き出していきたいという意図の下、会場も愛知芸術文化センターや名古屋市美術館のみならず、この両会場の中間地点でもある長者町地区を中心とした町の中にも展開します。世界各国からやってくるアーティストたちの多くは新作を発表する予定で、こ

感想ノートから

絵画と写真の交差―印象派誕生の軌跡

2009年10月24日(土)～12月20日(日)

特別展「絵画と写真の交差―印象派誕生の軌跡」においては、感想ノートにさまざまなご意見を寄せいただきました。タイトルや説明の文字が小さく、会場も暗くて見つらなかったというご意見や、会場が地下にもあって、移動が大変だった、など、多くのお叱りの言葉も頂戴しました。保存上の問題から照明を落とさなければならない、作品点数の多さから地下の会場も使う必要があった、などなど、何らかの事情はあるのですが、今後、皆様に少しでも快適に鑑賞していただけるような環境を整えるべく、努力したいと思います。

展覧会の内容についての感想もさまざまお寄せいただきましたが、ひとつ、印象的だった感想をご紹介します。

「前に(たしか)豊田市美術館でカナレットをみたとき、すげー ち密で正確で、人間の目のちから、それを再現するちからはすごいな～と感嘆した。でもそれが写真をモトネタにしていたことを今日知りました。な～んだ・・・。し・か・し そのカラクリを知ってもカナレットの絵画の美しさ迫力はかわりません・・・!!!」

この感想は、いろいろな意味で嬉しいものでした。(たしか)豊田市美術館で、カナレットの作品を見たその体験が、今回名古屋市美術館でカナレットを見た体験と結びついて、

一人の画家をめぐるより豊かな体験をしていただけたのではないかと思います。カナレットはカメラオブスキュラを使って絵を描いたとされています。今回の展示では古いカメラオブスキュラと共にカナレットの作品が展示されました。カナレットがカメラオブスキュラを使っていたという知識を得ていただけたことも嬉しいことのひとつですが、「そのカラクリを知ってもカナレットの絵画の美しさ迫力はかわりません・・・!!!」という言葉には、絵画の本質的な部分が表れているように思います。カナレットの作品は徹底的に緻密に正確に風景を描いたものです。しかし、どんなに緻密に風景や人物を写し取ったとしても、そこに画家のいわば魂といえるようなものが込められていなければ、その作品は魅力的なものとはならないと思います。この方が書いてくださったように、カナレットの作品には、緻密さや正確さだけでは済まない何かが備わっているのではないのでしょうか。そのようなカナレットの作品の魅力を受け止めていただいたことに感激しました。今後も皆様に豊かな鑑賞体験をしていただけることを祈っています。(akko)



会場風景

の名古屋という町と繋がりのある作品を制作したいと、名古屋の町や歴史、文化について等様々なことに興味を持っています。このところ、来名するアーティストのそのような要望に対応するために、いつの間にか、必死に名古屋について勉強する日々です。ところが、彼らに名古屋のことを教えている筈が、いつの間にか、彼らを通じて、名古屋の町の新しい魅力に気付くことが多くなりました。普段、当たり前だと思っていることが意外にユニークで名古屋の特別な魅力だと気付いたり、あるいは、よく通る場所なのに、これまで知らなかった昔から続く素敵なお店を知ったりと、とにかく、新しい発見の連続です。人が交流するということ、ましてや、自身の鋭い感性を武器に生きるアーティストがやってくる

ということは、様々なダイナミズムを生み出すのだということを、日々、目の当たりにしているところです。トリエンナーレでは、そのような感性が名古屋という町に出会って生み出される作品がみなさんをお待ちしています！どうぞお楽しみに。(hina)



キュレーターミーティングの様子

どこがおもしろい?!

《鋼鉄による作品 長い手紙-0》は、名古屋出身の作家、久野真(1921～1998)の作品です。ごく初期を除いて、石膏や鉛、鋼鉄などを素材に用いた平面作品を数多く手がけ、その手法はレリーフ・ペインティングとも呼ばれました。今回の「どこがおもしろい?」は、2009年4月11日から6月14日までの期間にお寄せいただいた、皆さんからのコメントを紹介します。

「とーーーーーってもわかりにくい手がみです。なんのことにについてかいてあるのか、まったくわかりません。でもいろいろなデコボコがあるので、いいたいことがいっぱい、いっぱいあるんだとおもいました。」(ななみさん、7歳)

「右の方はみんながわらってあつまってきたみたいで、まんなかの方はまちでおどってパレードをしているようでした。左はまるがいっぱいあって、星のようでうちゅうにいるようです。いろいろあっておもしろい絵です。」(あずささん、8歳)

「書くことでは表せない特別な“何か”がある気がします。人が人へ物を伝えるときに、文字だけでなく絵で表せるんだ!とわかる一枚です。」(匿名、?歳)

「何か地球ではないべつの世界に来たようなふしぎな感じがしました。この手紙の中にすいこまれて、なにか自由でとても広い世界へいけるような気がしました。」(匿名、?歳)

「一人の人が生まれる時から死ぬ時までをインスピレーションしました。やはり思春期～30代あたりがカオスっぽいな～～」(チャーキーさん、33歳)

「私は世界中の人々の心が一つになった時の物のような気がします。人の心は難しくて、一つにはなりにくいけど、そのため間があくこともあるけれど、そんな不思議な×2心がそろうことがあるのかもしれないと、私は思いました。」(アキホさん、12歳)

「人の心をあらわしたものだと思います。人の心はめまぐるしく形を変えます。そしてそれは終わることがありません。時に激しく時に緩やかにうつり変わる人の心には実体がありません。目には見えないものなのです。だから

人によって表現の仕方は様々です。久野真さんはこのように表現したのです。とりとめなく、つかみ所のない作品ですが、1つ1つのブロックに描かれている模様は、よく見ると隣のブロックと連続しているものもあります。人の心は未来や過去とつながっていくということを表現していると思います。そのつながりがあることを“長い手紙”と作品名で表現したんだと思います。未来や過去の自分と今の自分の心はつながっていることを、変化していく自分の心に対し、メッセージを宛てた作品ではないでしょうか。」(カノンさん、21歳)

「真ん中より少し右のゴチャゴチャしているところ、なんだか最近起こった自分の身の回りの事件を一生懸命書いてるみたいで笑えました。最初のあたりと最後のあたりは落ち着いて決まりのごあいさつ!?(ちゅちいさん、40歳)

「鋼鉄で書いた手紙なんかもらったら、気になってしょうがなくなっちゃいそうです。その人のこと。」(ペンペンさん、?歳)

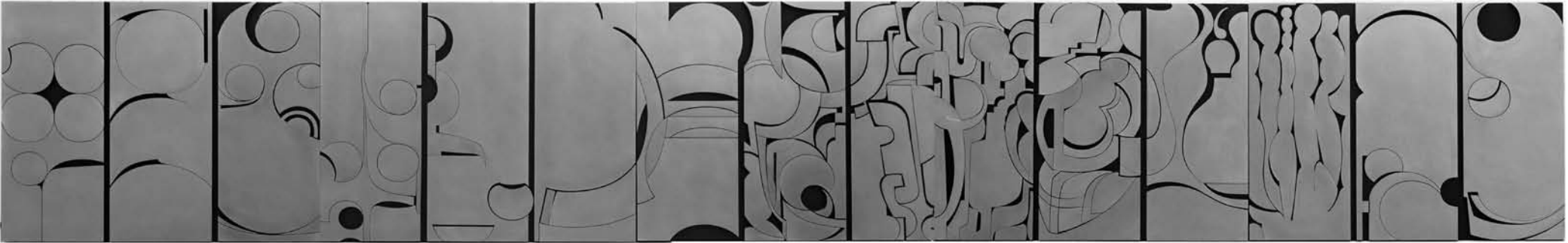
「左はし、体細胞分裂、細胞形成されて減数分裂したのち果実がみのり風にとばされる、ころがって鳥につつかれたり、自動車にひか

れてつぶれたり社会の荒波にのまれつつ発酵していく果肉、胞子が生えて肉体は完全に腐敗して残った種子は再び大地に授入、新しい生命の核となった。ようするに、きっとたくさん困難があるだろうけど、こんな何億万もの生命体の中で僕らが出会えたのはキセキ、君と子孫を残したいという、生命誕生レベルからのラブレター。」(るりさん、18歳)

「手紙に物語が感じられる。鋼鉄というかたい素材でありながら、心のやわらかさが現れている。」(ほーさん、20代)

「はじめは円などのごく単純な曲線がだんだんと複雑になってゆき、何度も曲がるようになってゆくが、最後には原点にもどるかのようになり、またシンプルなものとなって消えていく。一人の一生の周りの人間の変化に見えました。どんどん色々な人と関わって行って、増えたり減ったりして、最期には本当に大切な人が心に残って死んでいく…ような死期を感じる“手紙”だと思いました。」(りほさん、17歳)

横書きの文面は左から右へ、縦書きは右から左へ向かって書くのが通例ですが、さてこの手紙、皆さんはどちらから読みましたか? (3)



久野真《鋼鉄による作品 長い手紙-0》1988年

常設展だよ!

平成22年度の常設展について

名古屋市美術館の常設展(名品コレクション展)は、ここ数年は年3回の展示替えにより、それぞれ特集テーマを設けて順次、所蔵作品を紹介しています。

今年度の名品コレクション展Ⅰでは、エコール・ド・パリのコーナーは「コンポジション(静物／人物)」と題して、静物画と人物画における「構図」「構成」の在り方を見直します。メキシコ・ルネサンスでは、「壁画―下絵と写真」をいくつかの作例を実際に比較しながら見てもらいます。また、新しい試みと

して、現代の美術と郷土の美術を横断するかたちで共通テーマ「絵画と彫刻のあいま」を立てて、絵画と彫刻の境界線上にある作品などを見ながら、美術ジャンルのなかで代表的な「絵画」と「彫刻」の問題と関係について考えます。

名品コレクション展Ⅱでは、恒例となった「夏休みこどもの美術館」の企画として、作品の制作過程に着目し、とくに作品の素材や技法に焦点を合わせて、作品を選定するとともに、関連したワークショップを開催します。たくさんのこどもたちが見ることが楽しくなる展示内容を踏まえた体験学習に参加してもらえるように鋭意、企画中です。

また、「あいちトリエンナーレ2010国際美術展」の開催時期と重なることも意識して、4つの収集方針に関係する都市と時代を

キーワードとして組み合わせて、「パリ1910～30年代」「メキシコ・シティ1930～50年代」「東京1950～70年代」「ニューヨーク1970～90年代」というタイトルで、名古屋市美術館の代表作家の作品を紹介します。

名品コレクション展Ⅲでは、「藤田嗣治とパリの日本人画家たち」「アメリカの作家たち」「線描を楽しむ―浅野弥衛を中心に―」などのテーマのほかに、とくに「シュルレアリスム」の観点から、メキシコ・ルネサンス、現代の美術、郷土の美術のコーナーを連関させるかたちで、魅力的な作品を紹介します。

常設展示室3では、これまで名古屋市美術館が特別展として開催してきた名古屋の現代美術家たちを紹介する展覧会を継承する常設企画展として、新たに「ポジション2011」展を開始します。第1回となる今回は、和紙や米

などの日本人にとって身近な素材を使った作品を制作してきた名古屋の女性作家・米山和子(よねやまよりこ)を紹介します。

また、1969年から1974年にかけて、新しい美術表現を試みた名古屋の現代美術グループ「ぶろだくしょん我S」の異色の活動を初めて回顧する常設企画展も開催します。「我」の複数形の集団は、どのような表現活動を展開したのか、作品と資料を通して紹介します。

このように盛り沢山の内容で、常設展と常設企画展を開催しますので、特別展ばかりでなく、常設展にも是非足をお運びください。毎日、午前と午後、ボランティアによるギャラリー・トークも開催しています。(sy)

郷土の作家たち

野水 信(のみず しん／1914―1984)

彫刻家。1914年、石川県金沢市に生まれる。1931年、石川県立工業学校を卒業し、1934年、二科展に女性の頭像を出品し初入選を果たす。二科展には没年の翌1985年まで出品が続き、その間に特選受賞(1939年)、二科会会友推挙(1941年)、会員推挙(1951年、以後審査員)、評議員就任(1979年)と活躍した。

学校卒業後、野水は就職のために名古屋に移り住み、会社でエンジニアとして働きながら独学で彫刻を制作するようになった。戦争が終わると会社を辞し、生業を彫刻の道に絞る。1963年の夏、日本で初めての「世界近代彫刻シンポジウム」(国内外の作家12名による約3ヶ月の合同制作)が真鶴海岸(神奈川県)で開催され、本郷新、木村賢太郎らとともに代表に選出される。第一回(1965年)、第二回(1967年)現代日本彫刻展(山口県宇部市)にも招待出品するなど、戦後の彫刻史に確かな足跡を残した。

野水は名古屋の彫刻界に大きく貢献した。1931年に野々村一男らと共に結成した彫刻家のグループ「塊芸会」が、その後多くの若手作家を呼び込むかたちで、1947年「MC彫塑家集団」に発展し、名古屋市内のデパートなど

を会場に作品を発表。1953年以降は、伏見通や鶴舞公園、テレビ塔下広場などを会場に野外彫刻展を開催した。また、「朱泉会」、「Q造形グループ」といった名古屋周辺の芸術家を中心としたグループでも活動。1967年には、名古屋造形芸術短期大学彫刻科の教授に就任し後進の指導にあたっている。

人体塑像を主とする具象彫刻から、1950年代より次第に抽象彫刻へと転換。また抽象彫刻においても、時代の風潮に即しながら、石彫り、木彫、金属彫刻と、素材もスタイルも変化させてきた。しかしながら、明快な構想や、どこかに丸みを含ませる簡潔な形態は、野水の彫刻において、生涯を通じてほぼ一貫している特徴といえるだろう。(nori)



野水信《二つの石を貫く円筒》1978年

佐々木 豊(ささき ゆたか／1935―)

独特のヌード作品で印象深い佐々木豊は、1935(昭和10)年、名古屋市瑞穂区に生まれた。田光中学校在学中に、美術担当の画家三尾公三に油絵の手ほどきを受け、そのすすめで石膏とヌードデッサンをはじめ。1951年、前年に創設された愛知県立旭丘高校美術科に進み、同校では藤島奨に学んだ。同級生に彫刻家の石黒鏑二がおり、1年後には荒川修作が入学、赤瀬川原平が編入学した。1955年、東京藝術大学油画科に進み、伊藤廉教室に学んだ。卒業後は油画科専科に進んだ。

大学卒業の年から、国展で国画賞を2年連続で受賞。3年連続となる1961年には35周年記念賞を受賞するという、画家として華々しいデビューを飾った。初期の作品は、画集で見ると限りでは今の華やかな作風からは想像もつかない、渋めの半具象画であった。

70年頃からは、独特のヌード作品が多くなる。この後は、中学2年の時に師の三尾から受けた「あなたには女しかありません」という指導を守り続けることになる。当時の画面は、退廃的、挑発的で、女性への復讐めいたものさえ感じられる。これは「女性にふられたことによる」と自ら語るが、本当かどうか。ただ、多感な中学生時代に、デッサンの対象とはいえ、裸の女性を間近に見たことは、彼に一種屈折した感情を持たせたに違いない。しかし、80年頃になると画面は徐々に変化する。ポー

ズは相変わらず挑発的だが、エロスとは別の裸体が登場してくる。それは手応えのある、「脂肪」の重さを感じることできる「肉」である。イメージとしては「死」から「生」への転換である。

佐々木は小学校在学中、学童集団疎開先の宿舍の寺が三河地震で倒壊し、その下敷きになって先生と級友の多くを失った体験を持つ。彼のヌードの「生きている『肉』」の感触は、この時の体験によって心の奥底に刻まれた「死」の裏返ししの「生」の感覚の発露なのであろうか。

大学の専科在学中から各所の大学で教鞭を執り、また添削による絵画教室でも長く指導にあたっている。また「泥棒美術学校」『画風泥棒』など、単なる画法書にとどまらないユニークな著作も残しており、指導者としても一流と断言できるであろう。(hbk)



佐々木豊《姉妹》1978年 名古屋市美術館蔵

展評 2010年 2 月16日(火)～ 4 月10日(土)
Gallery + Café See Saw

木村充伯展「ジャンプする男」

このところ、名古屋で活動する若い作家の作品を見る機会が増えていて、ちょうど私より一世代若い作家達の感性が特におもしろいと感じることが多い。必ずしも世代の感覚の違いによるものでもないと思うが、おもしろいと感じるのは、自分が知らなかった感覚に感動するからだ。自分が思いも寄らないようなことに目を向けている感性は、知らないうちに私自身の中に育っている固定観念にも気付かされる。

木村充伯の作品は、一見、思わず脱力しそうなユーモラスな形態で私たちの前に現れてくる。絵を描くための油絵の具という材料で彫刻(oil paint sculpture)を作り、また油絵の具で描いたイメージを丸めたティッシュで写し取り(というより拭き取ったといったほうが近い)版画(dimentional print)にし、また、ドロ잉の背景をボールペンで塗りつぶすなど、その材料が存在している前提条件から疑ってかかるような、一見、クリティカルな態度で作品を制作している。それは、美術作品を



《ひもに顔》ひもに油絵具、2009年 photo: tan ruyi
作るための材料として存在している物に対して、ルールの範疇外のところから存在させようとする反則技でもある。しかし、全く別の視点から出発することで、作品の成り立ち方の大きな可能性の扉を開くことにもなる。また、時に稚拙ともとれるような子どもが描いたような形態だったり、逆に非常に緻密だったり、異様に愛らしかったり、実際は、クリティカルというよりもどちらかといえば日和見的で牧歌的な日常の存在という言葉がぴったりくる。しかし、ロープに吊り下がった人の顔などを見ていると、ユーモラスではあるのだが、そこに、どこか現代の世相を反映した社会の悲壮な雰囲気も感じるのである。とにかく、この不思議なコンビネーションで現前してくる作品の持つ感性には惹き付けられてやまない。(hina)

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

カラヴァッジョ 天才画家の光と影

原題：Caravaggio
監督：アンジェロ・ロンゴーニ
2007年イタリア・フランス・スペイン・ドイツ合作映画133分

カラヴァッジョ(1571ー1610)はバロック美術を先駆けたイタリア絵画の巨匠です。殺人を犯した画家としてスキャンダラスに取り上げられることの多いカラヴァッジョですが、カラヴァッジェスキと呼ばれる模倣者を生むほど時代を画した作家でした。光と闇の対比と精緻な写実表現によって今まさに出来事が進行しつつあると感じさせる動感のある劇的な画面は、今日でも見るものに強い印象を残します。

没後400年の今年、日本で公開される映画は、画家の38年の生涯を比較的に史実に忠実に描き出しています。それでも、殺人を犯し、不本意な最期を迎えた「呪われた画家」として劇性を高める作りになっているのは否めません。

この映画の見所のひとつは、「地獄の黙示録」('79)「レッズ」('81)「ラストエンペラー」('87)で3度アカデミー賞を受賞したヴィットリオ・ストラーロが撮影監督を務めた映像です。カラヴァッジョの絵画を意識して照明や色彩の階調にこだわった画面は、カラヴァッジェスキさながらにカラヴァッジョの絵画世界をトレースしています。カラヴァッジョの足跡をたどって行われたロケ地の当時そのままの姿や再現されている風俗風習もカラヴァッジョ

イベントレビュー

あいちトリエンナーレ トリエンナーレ・スクール

今年の夏に、あいちトリエンナーレが名古屋の町で開催されることは、「展覧会現在進行形」でもお知らせしたところですが、実は、トリエンナーレについてより多くの方に知っていただき、関わっていただくとうと1月から3月まで金曜日の夜にトリエンナーレ・スクールを開催しました。2月5日は「名古屋の現代アートシーンを振り返る」と題して、金城学院大学教授の山脇一夫氏を名古屋市美術館にお迎えしました。突然、現代芸術の祭典であるトリエンナーレ開催と聞くと、唐突な感じがするかもしれませんが、実は名古屋という地域と現代美術は深い関係があります。もともと、この地域は、河原温、荒川修作、桑山忠明をはじめとして、前衛的でありながら非常にすぐれた現代美術の作家をたくさん輩出してきた地域でもありました。また、今でこそ、日本各地に公立美術館が建設され、優れた現代美術作品を見ることが容易になりましたが、70年代には、まだそれほど現代美術の先端的な活動を見る機会は日本国内ではあまり多くはありませんでした。ところが70年代から80年代にかけて、

が生きた時代を知るうえで参考になります。とはいえ、いささか濃厚な映像とルイス・バカロフによる情感に溢れた音楽は、重苦しく時代がかった印象を感じさせないでもありません。劇性を高める演出とともに、カラヴァッジョの作品と同じく、見る人によって好悪が分かれるところでしょう。

東京都美術館の「ボルゲーゼ美術館展」(1月16日～4月4日)には、カラヴァッジョの《洗礼者ヨハネ》が出品されています。ボルゲーゼ美術館は、カラヴァッジョのパトロンでもあったシピオーネ・カッファレリ＝ボルゲーゼ枢機卿(1576ー1633)が収集した作品をコレクションの核にしています。シピオーネは教皇パウルス5世(1552ー1621、第233代在位1605ー1621)の甥で、映画にはカラヴァッジョが《教皇パウルス5世の肖像》を描いている場面があるなど、ふたりが画家の命運を左右する人物として登場します。映画は、1月にこの展覧会の記念映画会として一般公開に先立って上映されています。タイアップによって東京では話題作りと集客が計られていたようです。(み。)



©2007: RAI FICTION-TITANIA PRODUZIONI-INSTITUT DEL CINEMA CATALA'-EOS ENTERTAINMENT-GTM PRODUCTIONS

世界の先端的なアートシーンにつながる現代美術を扱う画廊が名古屋に集まっていたのです。山脇氏は、90年代の名古屋市美術館の開館後の活動にいたるまでの名古屋の現代アートシーンを紹介し、「名古屋が現代美術のメッカと言われた時代があり、それは実際に存在した」とおっしゃいました。また、当時、そういう名古屋で先端的な作品を目の当たりにした若者達が、現在世界中で活躍しているその一端を昨年の夏に「放課後のはらっぱ」展でもご紹介したところでもあり、山脇氏のお話からトリエンナーレに至るまでの名古屋の現代美術の歴史を感じていただけたのではないかと思います。夕方6時から夜にかけての開催だったにもかかわらず、中学生や高校生の方などたくさん若い方にも来ていただきました。あいちトリエンナーレが、準備に携わる私たちを含め、いろいろな意味で名古屋の将来につながる人材を育てるものになっていけるように頑張っていきたいと思いました。(hina)



展評 2010年1月12日(火)～1月24日(日)
ハートフィールド・ギャラリー

中谷ゆうこ展 ここから.それから kokokara. sorekara

現在ベルギーに在住して制作しているこの作家のテーマは、「意識下の世界」である。今回の展示で最もサイズの大きな作品は、格子状の形体を画面全体に描き出したものだが、それは、いわば「ざる」の表面のようなもので、「ざる」の網目から下へ向かって吸い込まれるように落下していくと、そこには意識下の世界が広がっているという。作家は、意識下の世界への入口、あるいは境界を描きたいようである。この作品の前には、白い球体に突起を施されたオブジェが紐で幾つも連なってぶらさがっている。このオブジェは作家が想像する「魂」の形で、床に置かれた鏡を通じて意識下の世界へと繋がっていく。

一方で作家は「人と人との出会いは偶然ではない。」と語っている。彼女は会場を訪れた人たちに粘土の塊を握ってもらってオブジェを作り、それを渦巻き状に配置することで、人の「気」をそこに集めようとする。まるで餃子のような形をしたそれらのオブジェは、それぞれの人の気配を宿しながら、会場の一角にひとつのエネルギーの場をもたらしている。このように、作家は目に見えない世界において人と人とを結んでいる何かをとらえようとしている。

会場では、在ベルギー日本大使館で行なわ

イベントガイド

■特別展

静けさのなかから：桑山忠明／村上友晴

「静けさのなかから」密かに現れてくるものと出会い、微かに聞こえてくるものと対話を交わす、心癒される豊かな時間。現代社会の日常の喧騒に晒される私たちが、大切なものを取り戻す絶好の機会になります。

ともに日本画から出発し、国際的に高く評価される現代美術家桑山忠明(1932～)と村上友晴(1938～)の、新作を含めた連続個展。それぞれにとって初めての本格的な回顧展としても、極めて貴重な展覧会です。

会 期：4月24日(土)～7月4日(日)
(前期)桑山忠明展 ～5月30日(日)
(後期)村上友晴展 6月1日(火)～
会 場：企画展示室1・2 常設展示室3
入場料：一般1,100円(1,700円) 高大生800円(1,100円) 小中生400円
※()内は、2回券。2回券は、全会期中に1名2回でも2名1回でもご利用いただけます。
※上記の他、各種割引制度があります。
※特別展の入場券で、常設(企画)展もご覧いただけます。

関連催事

○桑山忠明氏のスペシャル・ギャラリートーク
場 所：特別展「静けさのなかから」会場内
日 時：4月24日(土)午後2時～(観覧者対象)
○解説会
講 師：山田 諭(名古屋市美術館学芸係長)
場 所：2階講堂(定員180名 先着順 無料)
①前期：桑山忠明の芸術について
日時：5月16日(日)午後2時～
②前期：村上友晴の芸術について
日時：6月20日(日)午後2時～

■特別展

あいちトリエンナーレ2010 国際美術展

会 期：2010年 8 月21日(土)～10月31日(日)
「あいちトリエンナーレ2010」は、世界の

れたグループ展の模様も映像によって見ることができる。そこでは三人の美術家が作品を展示したが、五感を刺激する展示というテーマに沿って、粘土を握ってもらうパフォーマンスをはじめ、バイオリンの演奏やアロマセラピーも行なわれた。いわゆる美術の枠をはみだしたこの試みは、新鮮に映った。そして自分の感覚を大事にすることと、意識下の世界を知ることとは、どこかで繋がっているようにも思えた。

作家が描き出す白と深い、あるいは薄く透明感のある青緑色の世界は、私たちが日頃のいろいろな出来事の中で見失いがちな、しかし本当は常にそこに在る何か、なのかもしれない。それはおそらく、私たちにとって、とても大切な何かなのだろう。(akko)



photo: Isabelle Rousseau

トップアーティストが集う国際芸術祭です。名古屋市美術館のほか、愛知芸術文化センター、長者町地区などを会場に開催されます。※詳しくは、あいちトリエンナーレ実行委員会事務局へ(愛知県芸術センター内) <http://aichitriennale.jp/>

■常設展

○名品コレクション展Ⅰ

会 期：4月10日(土)～7月4日(日)
エコール・ド・パリ：コンポジション(静物／人物)

メキシコ・ルネサンス：壁画一下絵と写真
現代の美術／郷土の美術：絵画と彫刻のあいま

○名品コレクション展Ⅱ(前期)

会 期：7月17日(土)～9月20日(月・祝)
エコール・ド・パリ：パリ 1910～30年代
メキシコ・ルネサンス：メキシコ・シティ 1930～50年代

現 代 の 美 術：夏休み こどもの美術館
郷 土 の 美 術：夏休み こどもの美術館

○名品コレクション展Ⅱ(後期)

会 期：9月22日(水)～11月23日(火・祝)
エコール・ド・パリ：パリ 1910～30年代
メキシコ・ルネサンス：メキシコ・シティ 1930～50年代

現 代 の 美 術：ニューヨーク 1970～90年代
郷 土 の 美 術：東京 1950～70年代

■コレクション解析学2010ー2011

学芸員が当館のコレクションから特定の作品をとりあげ、その魅力などを紹介する講座です。 14時～ 講堂 先着180名 無料

○第1回 5月30日(日)

講師：角田美奈子(名古屋市美術館学芸員)
藤本由紀夫《THE SEPARATED》

○第2回 7月25日(日)

講師：清家 三智(名古屋市美術館学芸員)
元永定正《作品》

7月5日(月)～7月16日(金)は、休館します。

※当館ホームページ(<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>)を、ご覧ください。(A)